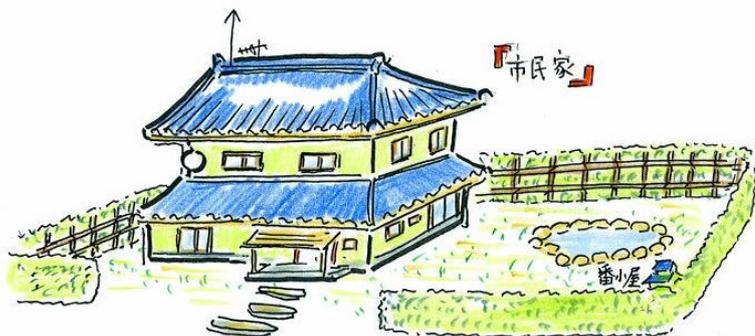


◆◆ 支援くんの火災予防奮闘記 ◆◆ これまでのあらすじ

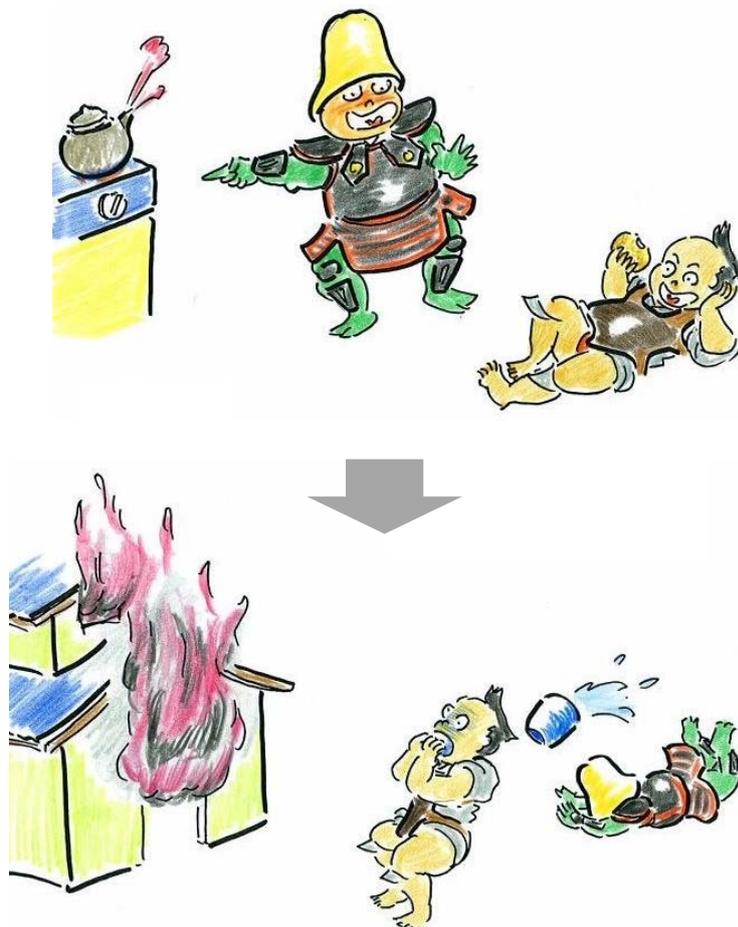
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の中間^{ちゅうげん} ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くんに比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.33

「朝顔に鶴瓶とられてもらい水（千代助）ってのはどういう状況なんでやすかね？」とご助が屋敷の庭で咲く朝顔を見ながら不意に語りかけてまいりましたな。

「ははは、そりゃあ鶴瓶師匠ではのうて、釣る瓶、井戸の釣る瓶じゃよ。鶴瓶師匠をとられちゃ麦茶も飲めなくなって皆が困るじゃろ。」と拙者が答えると



「な、なんでえヤヤコシイ。あっしはてっきり鶴瓶師匠かと思いやしたぜ。

ところで旦那様、井戸の釣る瓶ってのはどんなもんなんで？」と聞いて参りましてな

「そりゃあ・・・うーん、最近では井戸のある家なんざ見かけなくなったからなあ」と答え、地面に井戸と釣る瓶の絵を描いて説明したのじゃ。

「な、なるほど。」と言うご助に

「分ってくれたか？」と聞くと

「全然！全く分かりやせんぜ。大体、こんな下手な絵で理解しろってえのが端っから無茶な話ですぜ。」とご助に言われ



「むむむっ、家来の分際で横柄な口をききおって。」と拙者が叱ると

「お、横柄ってのは聞き捨てなりやせんぜ。ご自分の下手な絵を棚に上げて何でい」と尻を端折るものだから

「よ、よーし。井戸を見せてやる。」と物置からシャベルを2本、手に取り戻ると

「ほれ。」と1本をご助に渡したのじゃった。

「な、何をなされるんで？」と聞くご助に

「ここがよかろう。さあ、ここに井戸を掘るぞ。手伝え！」と命じ、『ザクツ』と池端にシャベルを突き立てたのじゃった。



「ほ、本気でやすか？井戸なんて簡単に掘れるんでやすか？」と戸惑うご助に

「池の隣じゃ。水はすぐに出るじゃろ。」という拙者の言葉に、ご助もしぶしぶ井戸を掘りだしたのじゃった。

しかし、ご助が心配したように、そう簡単に水が湧きでる様子もなく、夏の日長もいつしか暮れ、辺りが暗くなり始めたのじゃった。

それでも二人して掘り進めた穴は、1尺（30センチ）を超えておった。

「だ、旦那様・・・きよ、今日のところはこの位で・・・」とご助が泣きを入れた時でござった。

『ガチッ』と拙者のシャベルが何か固いものに当たった音が

「おっ？何かあるようじゃのお」と更に掘り進めると、何やらまあある物が・・・

「泥で良く分からん。ご助よ池で洗ってみてくれ。」という

「何か分かりやせんが、もう止めましょうよお、腹が減って来やしたぜ。」

と不平を抜かずご助に

「分かった分かった。今日はもう止めにするから、兎に角そいつを洗ってみよ。」と命じたのじゃった。



「へいへい。」とご助は『まあい物』を池の端まで運ぶと

「これが昔話なら美味しい美味しい桃なんじゃがのお・・・」と、ジャブジャブと洗い始めたのじゃった。

「旦那様あ、何ですかねこりゃあ？」というご助に

「穴の中の儂に分かるかっ！おのれが洗っておるのじゃろうが！」と吐りつけると

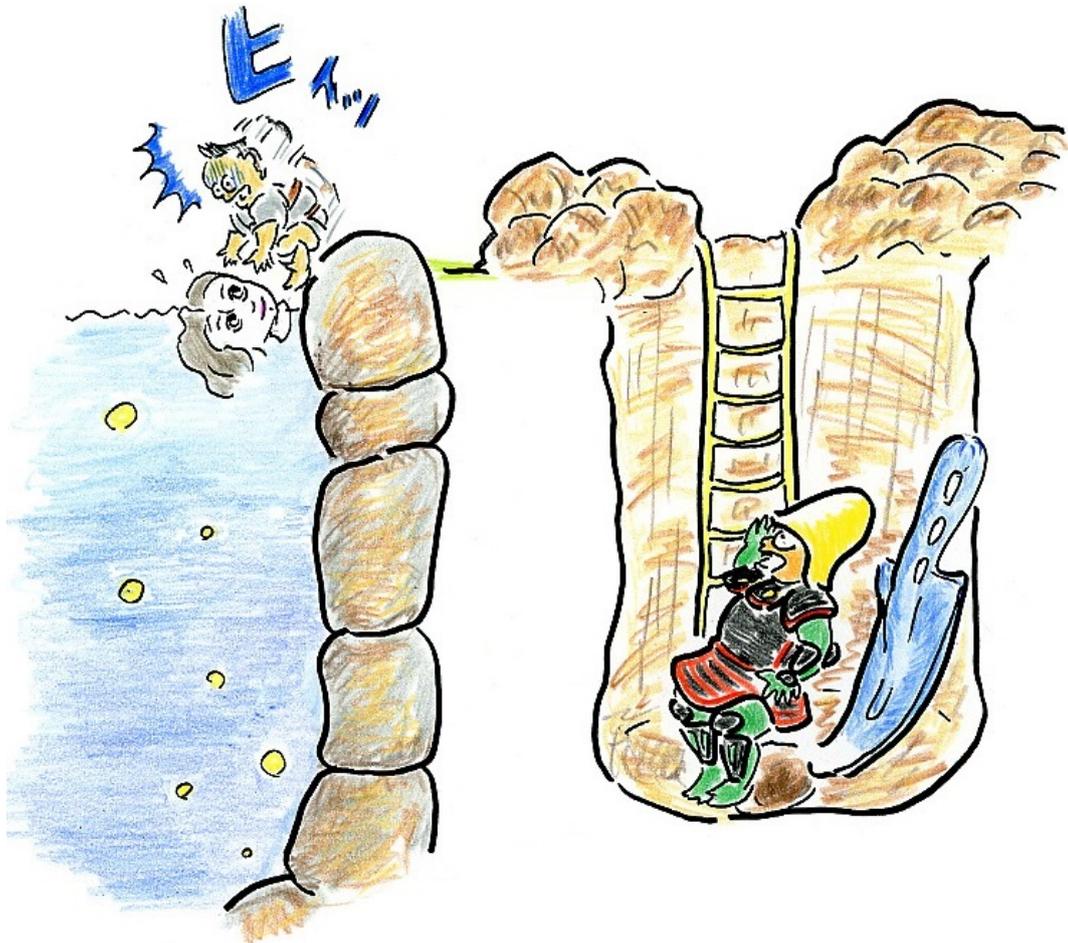
「なんだかなあ・・・もじゃもじゃと・・・」という声が出て、その後

「ひひひひっ」というご助の悲鳴と、

『ポチャンッ』と何かが池に落ちる音が続き、そして、長い静寂が訪れたの
じゃった。

「ご助えっ！池に落ちたのか？大丈夫か？」という拙者の呼びかけに返事
はなく

『しもうた。ご助の奴池に落ちおったか？』と急いで穴を登り始めたのじゃ。



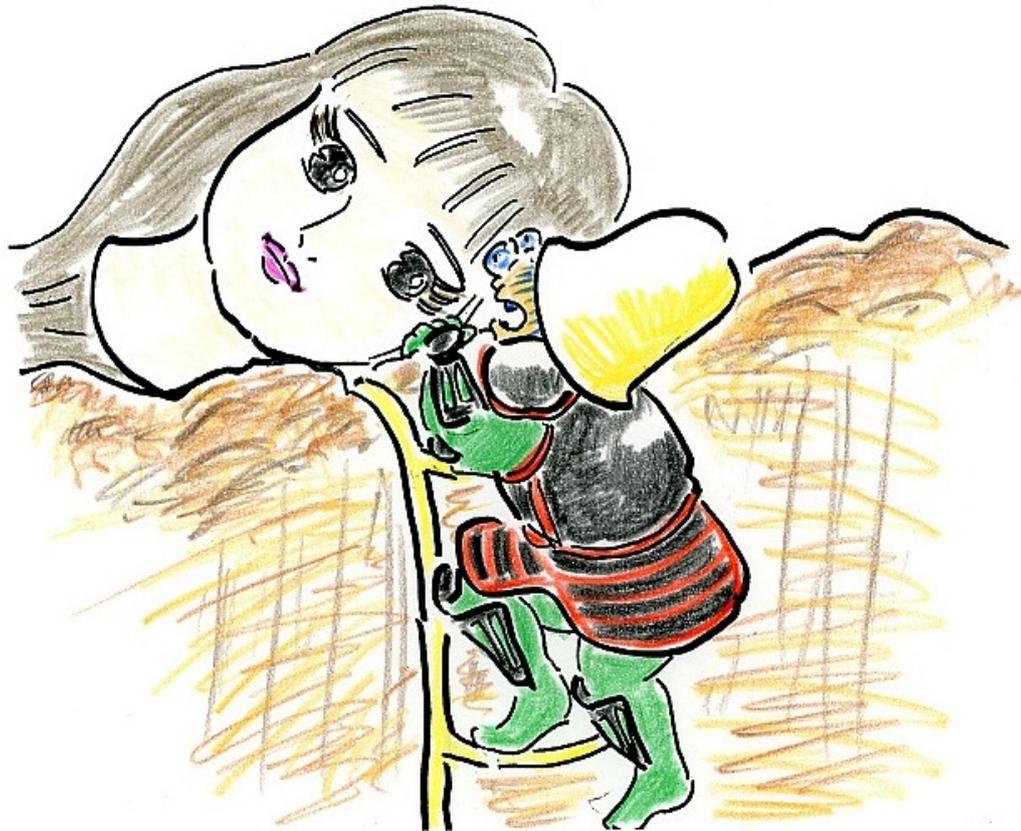
「ご助え、大丈夫かっ？」と穴を登り切った拙者が目にしたのは

『カッ』と目を見開いた女の顔じゃった。

「ひええええええっ」

その顔は・・・まごう方なく、先日、拙者がこの池端で見た女の顔に見えた
のじゃ。

それっきり、拙者は気を失ってしまったのじゃった。



「だ・・・ま、だん・・・さま、旦那様！」と誰かが拙者の肩をゆすっておる。

「・・・ううう・・・お、起こさないでくれえ・・・怖いよう・・・」と半
べその頬を誰かに『パンッ』とはたかれ、拙者は目を覚ましたのじゃった。

そこには、心配そうに拙者を覗き込む姫様とご助の顔があったの。

「ちえん、きがちゆいたか？」と姫様に聞かれ

「・・・せ、拙者は・・・あっ、女は？あの女は？」と取り乱す拙者に姫様が

「ちえん、えんちゃんの『リカちゃん』を見つけてくりえてありがとう。」

とおっしゃったのじゃった。

「???・・・姫様の・・・リカちゃん？」と呆けておった拙者に

「だ、旦那様。あっしらが見つけたのは姫様のリカちゃん様の頭だったよう
でき。」というご助に

「ど、どうしてそんな物が？」と拙者が聞くと

「あによね、えんちゃんがお庭で遊んでいたら首が取れちゃったによ。そし
たら弾みでパパが作っていたお池の方に転がって、分からなくなっちゃったによ。」

と姫様。

「そ、それでは拙者達が見たのは！！」と絶句する拙者にご助が

「そ、そうでさ。リカちゃん様が 『見つけてえ～、見つけてえ～』 て・・・」

とご助が顔を寄せてくるのに

「こ、声を変えるな、馬鹿者が！怖いじゃろうがっ」と振り払ったのじゃった。



「そ、それより旦那様、大活躍ですじゃ。」とご助が這いよってくるのに

「よ、寄るでないっ。寄らずともそこでちゃんと聞こえるわい。」と諭すと

「ちえっ、折角の良い話に水を差しやがって。」と悪びれるご助に

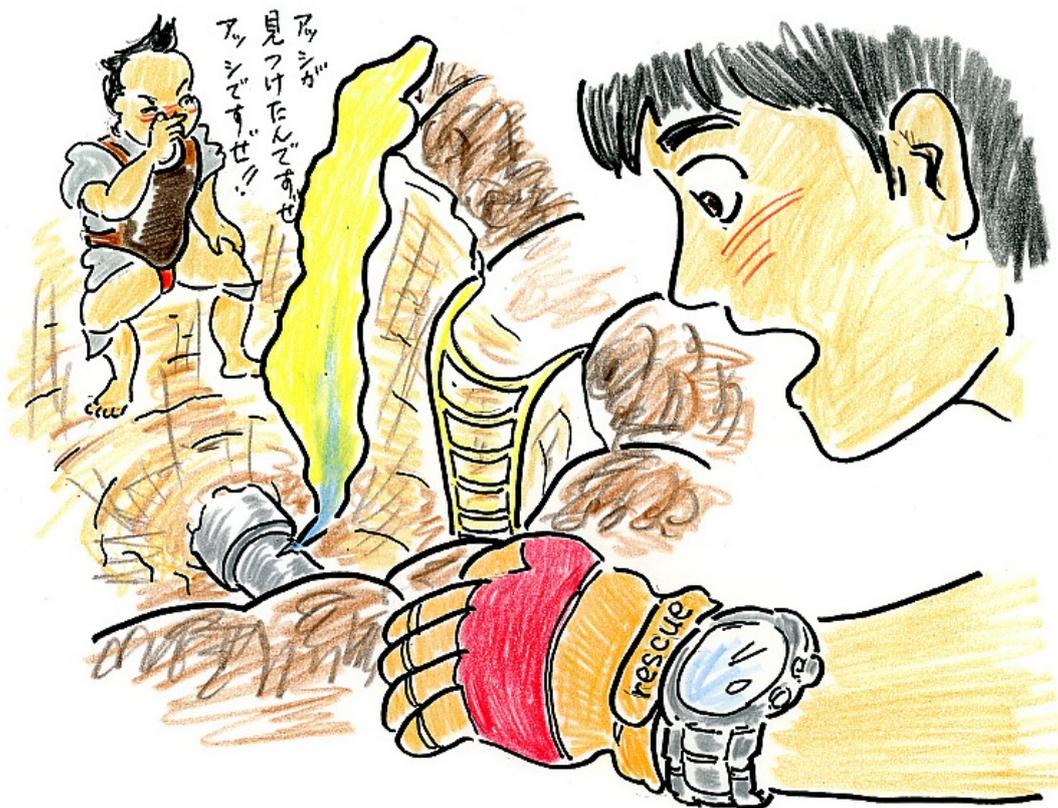
「さっさと言えわんか！馬鹿者が。」と叱ると

「へいへい、言いますよ。実はね、あっしが掘った穴の下には都市ガスの配管が通っていたんでさ。」とご助

「・・・？お主が掘った？あれは拙者が掘るぞと申したのではなかったか？」

と言うと

「こ、この際どっちだって良いじゃねえですかい。兎に角、穴の中の配管に傷がついていたんでさ。主様が池を作るときに傷つけたんでしょね。ほうっ
ておいたらガス漏れで大災害になるとこでさ。本当に大活躍でさあ」とご助は
誇らしげに話すのじゃった。



「そ、それは本当か？」と聞き返す拙者に

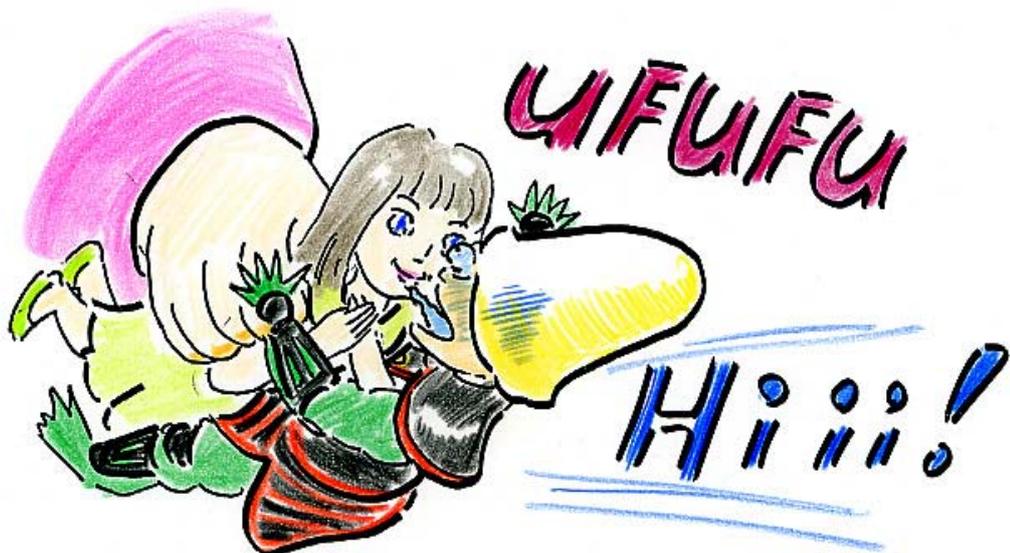
「ほんちょうよ。パパは『うわー、良かったって大喜び。』えんちゃんに新しいリカちゃんを買ってくれると褒めてくりえたよ。」と姫様が

「そ、それはようございましたな。」と拙者が姫様に言うと

「うん。でもね、えんちゃんは要らないっていっちゃんの。こうやってリカちゃんが返ってきてくれたんだもん。」というとき首を取り付けたリカちゃんを拙者の顔に押し当ててきたのじゃった。

その時のことじゃ、微かにリカちゃんの口元が吊り上がり、その口から漏れてきた

『うふふふ』という声を聞いたのは拙者だけだったのじゃろうか？



薄れゆく意識の中、拙者は感じておった

『こ、このお顔は・・池端でみた女とは・・・・・違う・・・・・』と・・・・・。

(その3へつづく)